

明治代男

柴田鍊三郎

朝日新聞社

明治一代男
柴田鍊三郎

明治一代男 定価 380 円

著 者 柴田錬三郎

昭和 38 年 7 月 30 日第 1 刷発行

発行者 朝日新聞社 浜名二正

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 東京 北九州
大阪 名古屋 朝日新聞社

目

次

第 七 章	第 六 章	第 五 章	第 四 章	第 三 章	第 二 章	第 一 章	序 章
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	--------

186	160	124	107	80	54	27	1
-----	-----	-----	-----	----	----	----	---

第八章
第九章
第十章
第十一章
第十二章

装幀 佐野繁次郎

311 285 260 237 211

序 章

一

嘉永三年の秋、但馬国養父郡高田村の百姓利助の女房しげが、稲刈の最中に、産気づいて、そのま
ま、田の畔に建てた鳥追い庵で、男の子を生み落した。

亭主の利助は、大名行列の人足をつとめる助郷という課役にかり出されて、ここ数日留守していて、
しげ一人、稲を刈っていた。

すでに、五人の子を生んでいたしげは、陣痛が起ると、

「晩に起ってくれりや、よかろうに——」

他人事のように、呟いて、重い腹をかかえて、鳥追い庵に入った。

洗い桶を脇に置き、布子と腰巻を汚さぬように、くるりとまくり上げて、まる出しの臀を、打ち藁
へ据えて、枋を横にしてうしろ頸にあてると、その両端を掴んで、仰臥した。

じっと、宙を噴めて陣痛に堪えるしげの眸子は、無心であった。

やがて。

しげは、ひくく呻き乍ら、大きく上げた下肢を、びくんびくんと痙攣させて、敷いた藁を蹠で、蹴った。

流石に、枴を掴んだ双手には、あぶら汗が滲んだ。

しかし、必死のふんばりの時間は、きわめて、短かった。

股間から、水が噴き出て、二尺も高くはね散ると、しげは、ほっと吐息して、枴から手をはなして、額の汗をふく余裕すらみせた。

上げた脚のあいだへ、押し出され、ころがった赤子を、薄目で見やってから、しげは、そのまま、半刻ばかり、動かなかった。

やがて、のろのろと起き上ったしげは、洗い桶に浸けた手拭いを、しぼって、赤子を拭いてやり、自分のからだも拭いた。

陽が落ちてから、しげは、半分以上も刈りのこした稲のことを考え乍ら、赤子をふところにして、わが家へ、そろそろと歩いて戻って来た。

七歳と五歳の男の子が、空き腹をかかえて、待っていた。

「ほら、弟やで」

しげは、長男へ、まるはだかの赤子を渡しておいて、稗を煮るために、竈突の前に、しゃがんだ。貧血のために、眩暈が来たが、気にならなかった。

亭主の利助が、帰って来たのは、三日後の朝であった。

「生れたぞな」

しげに云われて、利助は、「うん——」と頷き、ちょっと考えていたが、押入れから、汚れた障子紙をとり出すと、台所へ降りて行った。

しげは、柄杓で、障子紙を濡らす亭主の行動を、無感動な眼眸で、眺めた。

亭主がそうするのを、しげが眺めるのは、これで、四度めであった。

三男が生れた時、利助は、

「まびくかう」

ぼそつと云つて、庄屋へ出かけて行き、貼りかえた古い障子紙を貰つて来たのである。それを濡らして、赤子をころがしてある納戸へ入る亭主を眺めて、しげは、思わず、身顫いしたものだつたが……。

いまは、それをあたりまえの処置として眺めている。

利助は、納戸に入ると、濡れ紙を、赤子の顔へ、べたりと貼りつけて、

「南無あみだぶ、南無あみだぶ……」

と、申しわけになえた。

利助としげは、稲刈りに出かけ、子供たちは、葎をさがしに山へ行つて家の中は、ひっそりとなつた。

もし、この時、一匹の小猫が、入つて来なければ、赤子の生命ははかなく消えてしまったに相違ない。

ちよこちよこと、納戸へ入って来た小猫は、そこに、奇妙な生きものを見つけて、きいた風に、せなかをまるくしたが、どうやら、害敵ではないらしいとさすると、前脚で、ちよいちよい、といったずらしはじめた。

爪が、濡れ紙にひつかかるや、あわてて、ふりはなそうと、ひっくりかえった。そして、その濡れ紙あいてに、目まぐるしく格闘して、めちやめちやにひき破ってしまった。

赤子は、はじめて、弱々しい泣き声をたてた。

小猫は、びっくりして、はね起きると、一目散に、逃げ出して行った。

昏れて、戻って来た夫婦は、長男に抱かれています赤子を視て、びっくりした。

「おのれ、勝手なまねをさらす！」

利助は、長男が、ふびん心を起して、濡れ紙を剥いでやったものと思つて、したたか、頬^ほを^おはりとばした。

長男は、憤然となつて、家に戻つて来てみると、赤子が泣いていたことを弟にも証言させた。

「自分で、剥ぎ居つたのかの？」

利助は、女房と顔見合せた。

「死にとらなかつたんやろうな」

しげは、長男から、赤子を受けとると、乳房をふくませた。

利助は、おそろしい勢いで乳をのみはじめる赤子を慥然^{がぜん}として、見やり乍ら、

「しかたがねえ。育ててくれるか」

と呟いて、歎息した。

二

もう一人、口をふやすということが、貧しい百姓にとって、どんなに重大なことか、当時のくらしぶりについて、生野義拳の総帥・沢宣嘉という公卿が、次のように、記している。

『貧しい百姓というものは、おのれは持分の田というものはなく、人の田を預つて耕すもの、十人に八人までは、皆さる事にて、今日の畑けいさえも立てかねて、身には襤褸ぼろをまとい、食いものは稗ひなどに菜を交えて食いつつ、わずかに生命をつなぐ有様で、さほどにもない百姓でも麦よりほかには食とせず、木綿の着物を洗い張りしたのなどは上の部というべきで、一文すらのたくわえもないため、牛馬の飼料、鋤つくの修理くわいにいたるまで、みんな有徳の人から金を借りなければならぬ。田返しの道具もようやくととのうと、暁の月の影がまだ白い頃、霜のこおる田に降り立って、飢餓をしのび乍ら、新小田あらを掘りかえす手さえも、かがみつつ働きかねて、ややしばし、枯草を集め、焚火もやして、身うちがすこしぬくもると、また降り立って、氷の敷いた水田に、脛すねを浸しつつ幾日か土を掘りかえす。これが、春のはじめのことで、弥生をすぎる頃は、苗代小田に水をせき止めて、早苗をとる。この頃は、朝は早く起出で、男女のわかちなく、腰を二重に折って、鳥が餌をひろうような姿勢になって、朝から日の暮までも、からだは泥にまみれつつ、背中は雨に濡れるにまかせて、となりの人におくれまいとはげむのである。それぞれに、植付けて、青みわたった千町田に朝風の渡る景色は、他目には涼しく映

るものの、百姓自身は、この時の草とりの苦しさは、云おうようもない。森の木蔭のやり水に、照る陽のかげをかわしたり、風のよく通う高殿に、扇をつかつていても、水無月の暑さは堪え難いのに、百姓たちは、田に出れば、木蔭などあらばこそ、水はにえた湯のごとく、頭にかつぐ竹皮の笠も、半ばは破れつつ、背中は直に陽光を負うて、左右の手で、沸きかえる泥をかきならし、苗の根をよく延びやすいようにしてやり、虫が付いていれば、油を流し、竹棹ではらつてやり、これを毎日おこたりなくつづけるからには、顔も手足も、陽に焼かれ、爪は泥でかき尽して、指の先から血も滲む。それをいとわず、日々に転るわざのくるしさも、ひでりとなると、さらにそれが増し、夜昼なしに、日焼け田に水を汲み入れて、わずかにも稲を枯らすまいと、いそしむ。寝る間もない短夜の夏が過ぎ、秋風が身にしてみても、桐の一片も落ちて、稲穂の花が咲き満ちて実をむすぶ頃になると、鳥けだものが、集つて来て、啄みはじめるので、これをふせぐために案山子を立て、引板を引いて、田の畔ちかくに、そこそこに、かり庵をつくつて夜も昼もまもりつめなければならぬ。さて刈りとつた後の手数はまた、かぞえきれず、稲こき、春ひき、それぞれにわれおとらじと、女も童もいさみあい、うたう謡は、大層たのしげにきこえるが、年貢を納めれば、残るのは、ほんのわずかで、それさえも、先に金を借りた人に取られて、一年の辛苦は水の泡よりも、あわれとなる。この冬をすぐすためには、とり入れがすむと、すぐに、険しい山にのぼつて、柴下草を刈りとつて、里に出て売りあるき、すこしの銭を得ても、これもまた年貢に出てしまう。そのほか、茶つみ、蚕かい、紙漉き、苧をつくり、綿を植え、野菜をそだてる間に、草鞋やそのほかの藁細工も作るのだが、すべて年貢そのほかに消えてしまつて身につけるものは、依然として破れた木綿の綿入れ、朝夕に食するのは麦と稗、さらに、この貧しい

くらしに、夫役が課せられて、重荷を負うて山坡をこえる労働を、牛馬とともにつとめなければならぬ。このような苦しみを、一日さえも目にもとめずに、暖かに身に美服をまとうて、口に美味をくらひ、さらにその上、何くれと、物好みをする人は、とくと考えてみるがよい』

百姓には、こうした苦しみのほかに、階級的な蔑視の下で、一生をすごす卑屈が強いられていた。「生かさず、殺さず」

という方針によって、徳川家康がつくりあげた封建制度の中で、百姓は、その二百余年を忍従の二字につきる運命にあまんじて、ほそぼそと生き、檻樓のように死んで行ったのである。

そのような家の一軒に、生れて、育つことがゆるされても、この子の生涯は、なんの幸せもめぐっては来ないであろうと思われたが……。

三

捨吉と名づけられたその子は、育つにつれて、誰の目にも、まびきそこないに映った。

啞ではないか、と疑ったほど、立つて歩き出してからも、口をきかなかった。おそろしくおでこで、鼻よりも顴骨の方が突出して、おまけに、頤の顎が張って、なんとも奇妙な貌であった。ただ、小さな奥目が、団栗のようにまるいのと、耳朶が、ばかに大きく、柏の葉のようにひらいているのが、ふしぎに愛嬌があつて、その小さな眸子で、じっと仰がれると、誰でも、微笑を返してやりたくなった。取柄といえは、それだけであつた。

実は、恐怖というものを母親の腹の中に置き忘れて来た凶太さがそなわっていたのだが、この最大の特質は、誰にも気づかれず、また發揮する機会は当分来そうもなかった。

捨吉が、六歳になった時、一家は、さらに惨めな状態に陥った。

その年も、農繁期に、村の男たちは、大名行列の助郷にかり出されていたが、父親の利助だけが、死体になって、戻って来たのである。

助郷というのは――。

参観交替の大名道中に、宿駅では、要求された人馬に応じ切れず、宿駅の近傍の諸村から、人馬を徴発したのである。これは、百姓たちにとって、最もやりきれない課役であった。もし、出たくなければ、人一人につき七百文、馬一匹に付き一貫文という法外な金を、村では、問屋場に支払わねばならなかった。

百姓たちに、そんな金がある筈はなかった。おのれの労力を提供するよりほかはなかった。

利助は、大柄なので、その時の助郷には、その大名が將軍家から拝領したひとかかえもある唐火鉢を納めた箱を、かつがせられた。それを、あやまって、落した。箱は碎けて、唐火鉢は、三間ばかりの崖を、ころがり落ちてしまった。

利助は、その大名自身によって、手討ちにされたのである。

急報によって、高田村大庄屋の中島太郎兵衛は、死体を受けとりに行ったが、一言も詫びずに、黙って受けとって来た。

後年、虚無僧本多素行とともに、沢宣嘉を総帥に仰いで、生野に義兵を挙げた人材であった。ただ

の庄屋ではなかった。

太郎兵衛は、哭なき崩れるしげや伴たちの前に端座して、

「あやまちを犯さぬ人間は、この世に一人も居りはせぬ。たかが火鉢を落したぐらいでその火鉢がひびでも入ったというのであれば、まだしも――、尊い人の生命が斬りすてられては、たまったものではない。將軍家であらうと、大名であらうと、同じ人間ではないか。あくびもすれば、糞もたれる。身分の上下はあっても、生命の尊さには変りはない。わしは、今日ほど、腹の立ったことはない」と、云った。

しげも長男も次男も、ただ、その言葉に、泣くばかりであつたが、一人、捨吉だけは、泣かずに、小さな奥目を光らせて、じつと太郎兵衛を睥みづめていた。

太郎兵衛は、ふと、その眼眸に気がついて見かえし、

「わかったな」

と、云ってやつた。

捨吉は、こくりと合点した。

捨吉が、庄屋の言葉を服膺ふくようして、その生来の図太い度胸を示したのは、それから三年後であつた。高田村は京阪ならびに播州方面より城崎温泉きのさきに達する街道に面して、人馬繼立つぎたての駅になっていたので、人の往来は、頻繁ひんぱんであつた。

その街道に沿うた小川で、捨吉は一人、小魚を簞ざるですくっていた。

兄二人は、母親とともに、野良へ出て居り、捨吉が、晩のおかずを採る役目であった。

もう小半刻も、水につかつていたが、一向に、策にかからなかった。

それでも、倦きもせずに、捨吉は、水底をさぐっていたが、そのうちに、策をかすめて、ひらっと、長い黒いものが走った。

——うなぎじゃ！

狂喜した捨吉は、無我夢中で、それを追うや、ひとすくいに、そいつを、策ごと、ぱっと、路上へ、抛り上げた。

とたんに、

「無礼者っ！」

金切り声が、あびせかけられた。

びっくりして仰ぐと、十三、四歳の武家の少年が、凄い形相になって、睨み下していた。泥水は、袴から胸にかけて、はねかかっていた。

乳母らしい三十前後の女が供をしていた。

捨吉は、いそいで、斜面を匍い上って行って、土下座すると、

「こらえて下されませ。あやまちでしたに……」

と、頭を下げた。

「詫びてすむか！」

少年は、いきなり、捨吉の肩を蹴とばした。

捨吉は、ひっくりかえって、斜面をころがり落ちた。

「上って参れ！ 手討ちにしてくれるぞ！」

少年は、きいた風に、身がまえた。

捨吉は、

——畜生！

と、胸で叫んだ。

手討ちなどにされてたまるか、と思った。

その反抗の気色が、少年を、いよいよ、かっとならせた。

「上って来ぬか、下郎め！」

少年が、喚くのに合せて、乳母が、険しい表情で、

「これ、代官様の若様であらせられますぞ。はよう、上って来て、お詫び申すのじゃ。さもなければ、そなたが手討ちになるばかりか、そなたの親も兄弟も、牢屋に入れますぞ」

と、脅しつけた。

捨吉は、代官の若様ときいても、べつに怖くはなかったが、母親や兄たちが牢屋に入れられてはかなわぬ、と思って、再び斜面を匍い^はのぼって行った。

しかし、地べたに両手をついたが、齒をくいしばって、詫びるのは止めた。

「こやつ！」

代官の若様は、捨吉の頭をぎりぎりとふみつけた。